

編集後記

恒例によって、今年度の活動を振り返ることからはじめよう。

まず、七月二六日に「琉球国王肖像画『御後絵』の再生と朝鮮国王肖像画『御眞』との比較」と題して、佐藤文彦氏（画家、沖縄大学・沖縄県立芸術大学非常勤講師）から御報告をいただいた。佐藤文彦氏による御後絵再生の試みについては、本誌第十七号に本学教授の井上研一郎による「御後絵―復元か、再生か、それとも―佐藤文彦『遙かなる御後絵』によせて」という論考があるが、今回はその御本人に御登場いただいたの研究会となったわけである。

次に、十月十日、山里純一氏（琉球大学）による「初めての三線」と題する研究会が開催された。この研究会は、昨年度に行われた本学の生涯学習講座「知りたいっちゃ沖縄、行きたいっちゃ沖縄」の沖縄ツアー（二〇一二年十二月実施）の際に、山里先生があざやかな三線の腕前を披露されたことに参加者から「私も三線をひいてみたい」という希望が出されたことを受けて企画が出され、「それでは」ということで晴れて実現したものである。さらに、今年度、二〇一三年十二月に開催された沖縄ツアーでは琉球大学にて再び三線講座が設けられ、琉球文化にどっぷりと浸ることができた。

そして、十一月二八日には琉球方言研究の第一人者である狩

俣繁久氏（琉球大学）による「多様性に満ちた琉球方言―琉球方言研究の魅力―」と題する研究会が開催された。これも先に記した生涯学習講座の受講生から「沖縄の言語について学びたい」という希望が出されたことがきっかけである。研究会では、タイトルにあるとおり、琉球方言の多様性が語られ、言語学の成果に裏打ちされた精緻な報告がなされた。参加者からも質問が相次ぎ、琉球方言研究の魅力を存分に味わうことの出来た研究会となった。

この場を借りて、佐藤文彦、山里純一、狩俣繁久の三氏にはあらためて心よりの御礼を申し上げたい。

さて、本年度の活動報告からもわかるように、今年度も先の生涯学習講座とタイアップしてのものが中心となった。その締めくくりは沖縄ツアーであるが、今年度については十二月二〇～二三日までの三泊四日で実施された。首里城や浦添ようどれの見学をはじめ、琉球大学八重山芸能研究会（通称 八重芸）の公演鑑賞など沖縄を味わうことができた。浦添ようどれと浦添市美術館では安里進氏（沖縄県立博物館・美術館館長）、八重芸公演では山里純一氏にお世話になった。この場をお借りして心よりの御礼を申し上げたい。

沖縄をめぐる話題としては、やはり普天間飛行場の名護移設問題を避けて通るわけにはいかないだろう。仲井眞知事による移設承認、その後の名護市長選における移設反対派候補の当選など、この問題は依然として混沌とした状況にある。かつて、沖縄戦でいわゆる「ひめゆり部隊」部隊を引率し、多くの教え

子を戦場で亡くした仲宗根政善は、戦後、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を著したが、その「まえがき」に「昔から平和であった沖縄のこの美しい空を、この青い海の上を、戦闘機の一機も飛ばせたくない。戦争につながる一切のものを拒否する。」と記した。今、沖縄は仲宗根の思いとは逆の方向に追いやられつつある。

今こそ本当に政治の叡智が試されなければならないその時に、日本は沖縄に明るい希望を抱かせられる状況にあるととらうてい言えない。しかし、私たちは立ちどまるわけにはいかない。沖縄に寄り添いながら私たちの叡智を傾けていきたい。

(文責 今林)